

出羽國  
鳥海山

いたれば消て常のごとし、因て焼山といふ、山上みな石にして、諸の地獄をかたどれり、三途川あり、賽の河原は、小石をもつて塔をつみかさねたり、修羅道は石の面みな血に染たり、劔の山さながら鎗鋒のごとく尖ておそろしく、其外それくの地獄いろくあり、

〔三代實錄清和〕貞觀十三年五月十六日辛酉、先是出羽國司言、從三位勳五等大物忌神社、在飽海郡山上、巖石壁立、人跡稀到、夏冬戴雪、禿無草木、去四月八日、山上有火燒土石、又有聲如雷、自山所出之河泥水泛溢、其色青黑、臭氣充滿、人不堪聞、死魚多浮、雍塞不流、有兩大蛇、長十許丈、相流出入於海口、小蛇隨者不知其數、緣河苗稼流損者多、或染濁水臭氣、朽而猶不生、聞于古老、未嘗有如此之異、但弘仁年中見火、其後不幾有事兵仗、決之著龜、並云、彼國名神、因所禱未賽、又冢墓骸骨汚其山水田、是發怒、燒山致此災異、若不鎮謝、可有兵役、是日下知國宰、賽宿禰、去舊骸汗并行鎮謝之法焉、

〔本朝世紀〕天慶二年四月十九日庚寅、諸卿參入、昨日被定官符等、請結政請印、給彼國使了、官符三通、皆給出羽國、○中一通鎮守正二位勳三等大物忌明神山燃有御占事怪、○此下文關

加賀國  
白山

〔和漢三才圖會五十六〕白山、乃白山、絕頂有池、名美止利池、云

按、元正天皇養老年中、越大德、後號泰澄大師、初開當山、傳見越前平泉寺之下、四時有雪、故呼曰越乃白山、又曰加賀白山、但在加越之堺、又跨於飛驒、越中大山也、此山開關、百有餘年後、弘仁十四年、分越前出加賀國、則加賀亦舊越路也、近頃加越有山論未決、

四條院延應元年白山自燒、後奈良院天文二十三年五月、亦自燒出、而麓地獄出云々、  
每六月中旬以後迄七月中旬、候雪稍解、登山雖三伏日、著絮衣尙寒、最潔齋可登、有登於加賀道、自越前登道記于左、○下略

〔續史愚抄四十八〕後奈良院天文十六年二月二日乙酉、加賀白山燒出云、年代略記、二十三年五月〇日、  
□加賀白山燒、皇年私記、年代略記、